

キング、フール、キリスト—中世のサイクル劇と祝祭—*

King, Fool, Christ —Medieval Festivals and Cycle Plays—

武蔵野女子大学短期大学部助教授 末松良道
Yoshimichi Suematsu

西欧の伝統的な社会で、とりわけ中世や近代初期においては、クリスマスを中心とする一連の冬の祝祭の期間は、12月6日の聖ニコラウスの祭日の頃に始まり1月6日の公現祭に至る約1か月間続いた。この時期、人々は教会、学校、そして村や都市で、様々の祝祭的行事に熱中する。そのうちのかなりの部分は、純粹に宗教的というよりは、民衆の非日常的な楽しみと解放を求めるエネルギーが、こういった祭日を契機に噴出したものであり、祝祭的慣行の個々のモチーフは、一年を通じてカーニバルを始めとする他の様々な祭日や、より一般的には、束の間の祝祭空間を出現させる遊び、行列、街頭や広場の種々のパフォーマンス、演劇の一部等として日常生活のあちこちに入り込んでいたと思われる。又、これらの行事においてなされた多くの慣行は、そこで祝われている聖者にまつわる伝説の多くがそうである様に、異教的な、また純粹に民衆的な伝統に基づいていたりもした。本論では、こういった民衆的慣行を、まず、クリスマスの時期を中心に行われる祝祭に見、次に、これらの慣行と中世サイクル劇のなかの共通点を指摘しつつ、サイクル劇の理解の一助としたいと意図している。

そもそも、貧しい大工の家庭で、しかも旅先の馬屋の中でのキリストの誕生を祝うクリスマスは、本質的に貧しいもの、弱いもの、そして社会階層の下に位置するものへの共感を自然に呼びおこす契機となる祝日である。従って、クリスマスの季節の祝祭的慣行の基本的要素として、一時的に、弱いもの、下位にあるものを高め、強いもの、上位のものを低くする、いわゆる「さかさまの世界」の出現を促す面があると言ってよい。このキリスト教に本来備わった特質と、階層区分の厳しい封建社会の安全弁としての祝祭の役割、そして、キリスト教とは元来関係のない土着信仰に由来する冬の祭の風習が混然となって一体化し、中世劇の研究にとっても興味深い幾つかの慣行を作り上げている。

また、これは中世後期において強まった、人間としてのキリストの信仰やマリア信仰とも一致

* 本論の為の研究を進めるにあたり、平成5年度武蔵野女子大学特別研究助成金を利用できた。大学当局と関係者に感謝したい。また、甲斐弘美先生には、いつもながら快く蔵書をお貸しいただいた事を感謝する。

する。中世末期におけるキリスト教信仰は、慎ましい家庭に生まれた人間としての神キリスト、および、慎ましい暮らしを営む庶民であるマリアやヨセフに注目することで、一般の人々の情念に訴えたが、そのような信仰のあり方は、絵画や彫刻は勿論、文学においても、叙情詩やサイクル劇をはじめとして、広くうかがうことが出来る。晩禱において歌われた『マリアの歌』(Magnificat)のなかには、この様な時代の雰囲気や代弁する言葉があり、それは、これから述べる「愚者の祭り」(The Feast of Fools)等の祝祭におけるキー・フレーズでもあった。主は、強きものを低くし、弱きものを高めたというのである。

And Mary said, My soul doth magnify the Lord,
And my spirit hath rejoiced in God my Saviour,
For he hath regarded the low estate of his handmaiden: for, behold, from
henceforth all generations shall call me blessed.
For he that is mighty hath done to me great things; and holy is his name.
And his mercy is on them that fear him from generation to generation.
He hath shewed strength with his arm; he hath scattered the proud in the
imagination of their hearts.
He hath put down the mighty from their seats, and exalted them of low degree.
(Luke 1: 46-52; my emphasis)

こういった精神に彩られた「さかさまの世界」の特徴を持ったクリスマスの季節の祭りとして、the Feast of Fools, the Feast of Asses, the Boy Bishop, the Lord of Misruleといった慣習がある¹⁾。例えば、愚者の祭りにおいては、中世のcathedrals, collegiate churches等の教会において、助祭、副助祭、聖歌隊の少年などの下位の階層に属する者達が、abbot, king, bishop, pope, Herod等と名付けた自分達の指導者、つまり、祭りの王の下に、日頃彼らを支配していた参事会員等の上位の者、年長の者の上に立ち、束の間のさかさまの王国を出現させる。この祭りの王は、教会の会衆の先唱者の役割と、杖(baculus)とをこの時に限って譲り渡され、教会の儀式を執り行う責任を引き受ける。晩禱では、前述のMagnificatの一節、“He hath put down the mighty from their seats, and exalted them of low degree”が朗唱され、その間に、前年の祭りの王から、新しい祭りの王へ杖が引き渡される。これらのさかさまの王国、とりわけ愚者の祭りは、教会の周辺や内部での、飲食、踊り、仮装、歌や大騒ぎ、ろばを連れた行列、そしてしばしば当局者からの激しい非難的となった仮面の着用等をともなっていた。即

1) 以下の祭りに関する説明は、次の研究に多くを負っている。E. K. Chambers, *The Mediaeval Stage*, 2Vols. (1903; rpt. Oxford: Oxford Univ. Press, 1967), Vol.1, Chs.13-15; Jacque Heers: *Fêtes des fous et carnivals*, (Paris: Fayard, 1983), Ch.3.

ち、ヒエラルキーの逆転と共に、日常を支配している常識的、理性的なものもまた、かなぐり捨てられ、それに取って代るのは、folly、即ち、愚行である。であるならば、この「愚者の王国」を支配する王としては、フールが最もふさわしい。事実、さかさまの世界の王、及び、参加者は、しばしばフールの姿で登場したようである。更に、既に述べたクリスマスの精神の原点に立てば、日常はさげすまれ、ある意味では、子供のように弱く傷つきやすい者の典型であるフールこそ、クリスマスのさかさまの王国を治めるにふさわしいのではなからうか。

更に、クリスチャンをフールと結び付ける伝統は、既に聖書の中に見いだされる。例えばパウロは言う、“for we are made spectacle unto the world, and to angels, and to men. We are fools for Christ's sake...” (1 Corinth. 4.9-10)。また、元来、広い意味でのフールの範疇としての狂気や知能の弱さは、聖性と結び付く力を秘めている。狂気につかれた者や、知能が足りないゆえに謎めいた事を口にする者が、神や預言者、あるいは逆に悪魔として、時には恐れられ、時には敬われて、信仰の対象となることは多い。中世においては、世俗の王ですら、病人を癒す超自然的な力を持っていなければならなかったことが思い起こされる。彼は、王であると同時に魔術師であり、彼の魔術はウィリアム・ウィルフォード言うところの“royal magic”なのである²⁾。

そう考えると、中世の人々にとって、人間の世界に一人の謎めいた、並外れて賢く、理性で計れない能力を備えた若者として降りてきたキリストは、まさに聖なるフールと見られることもあったのではないだろうか。神の子であると同時に、王のなかの王 (the King of kings) でもあるキリストは、腐敗した世俗の権力を否定して、貧しく、弱い者達を率いた愚者の王、中世の祝祭におけるフール・キング、さかさまの世界の王として、捉えることも出来るだろう。

サイクル劇の中で、キリストが最も王らしく扱われているのは、『エルサレム入場』の劇だろう。テキストを一読しただけで、この劇に、特に中世の祭りの明らかな痕跡を見いだすのは難しい。しかし、ここで描かれている聖書からそのまま取られた場面そのものが、愚者の祭りの様な祝祭の精神に見事に沿ったものだとは私は考える。キリストと使徒達は、中世的文脈に置けば、一団の放浪の説教師であり、丁度、愚者の祭りにおいてしばしばなされた様に自分達の指導者をろばに乗せて、エルサレムという聖なる地に入場する。あたかも、祭りの日に教会に繰り出した若者達の様に、あるいは、ろばを引いた副助祭達の様に。テキストを読む限り、キリストと使徒達は、まさに世俗の王の都市入場のごとく市民に迎えられる。ここに描かれているのは、ロイ・ストロングが解説しているような、中世、ルネッサンスの王の都市入場のペイジェントである³⁾。

2) William Willeford, *The Fool and His Scepter* (Evanston, IL.: Northwestern Univ. Press, 1969), p.152.

3) ロイ・ストロング、『ルネッサンスの祝祭—王権と芸術』全2巻、星和彦訳(平凡社、1987)、第1巻、20-31頁。

I Burgensis Hayll prophette preued withouten pere,
 Hayll prince of pees schall euere endure,
 Hayll kyng comely, curteyse and clere,
 Hayll souerayne semely, to synfull sure ;
 To þe all bowes.
 Hayll lord louely oure cares may cure,
 Hayll kyng of Jewes.

II Burgensis Hayll florisschand floure þat neuere shall fade,
 Hayll vyolett vernand with swete odoure,
 Hayll marke of myrthe oure medecyne made,
 Hayll blossome bright, hayll oure socoure,
 Hayll kyng comely.
 Hayll menskfull man, we þe honnoure
 With herte frely. (York, XXV, 489-502) ⁴⁾

しかし、歓呼されているのは、貧しい服をまとった、言わば、乞食坊主の一団であり、市民達の喝采を浴びているとは言え、カヤパやアンナスの様な高位聖職者やピラトの様な為政者からは警戒されている危険分子である。この『エルサレム入場』の劇は、その後続く受難劇の前提として、サイクルの中でも極めて重要な位置にある。即ち、ここにおいて我々は、キリストがろばに乗った貧しい身なりの王、つまり、祝祭の王 (a festive king) であると知らされるからだ。しかし、この平和裡に侵入した者達は、たちまち、神経をとがらせた当局者によって、現王権を否定し、自らを王であり神であると詐称する叛逆者として弾圧される。市民達の賞賛、体の不自由から解放された者達の歓喜、そして子供達の歓迎を浴びるキリストを迎えるエルサレムは、地上に束の間現れたユートピアであった。しかし、その聖なる都市は、たちまちこの世の地獄と化し、祝祭的無秩序 (festive misrule) を、真の不正義 (misrule) が押し潰すことになる。

キリストが、最も明確にフール・キングとして描かれるのは、サンドラ・ビルントンが指摘するように⁵⁾、ヨーク・サイクルの『ヘロデの前のキリスト』の劇である。ヘロデは、キリストに魔術師的な技を持ったフールを期待している。中世やルネッサンスにおいて、宮廷や街角で、宴席や祭りの際、人々を楽しませた芸人を、この噂となっている神がかりの男に望んでいるのである。

Rex O, þis is þe ilke selue and þe same—
 Nowe sirs, ye be welcome ywisse.

4) 本論におけるヨーク・サイクルのテキストは、Richard Beadle, ed., *The York Plays* (London: Edward Arnold, 1982).
 5) Sandra Billington, *A Social History of the Fool* (Brighton: Harvester, 1984), p.19.

And in faith I am fayne he is fonne,
 His farles to frayne and to fele;
 Nowe þes games was grathely begonne. (XXXI,115-19)
 For I haue coveite kyndely þat comely to knawe,
 For men carpis þat þe carle schulde be konnand. (137-38)

言うまでもなく、中世からルネッサンスにかけての多くの王宮や貴族や高位聖職者の屋敷にはフールが雇われ、そして、これらのフールは、錫を持って主人の影の様に宮廷を闊歩していた。彼らは王のネガのような存在で、常識と日常の中に、非常識と非日常を持ち込む事を許されていた。つまり、統治者 (ruler) の側に寄り添いつつも、*misrule* を持ち込む人物であった。ヨーク・サイクルのヘロデは、キリストをその様な非日常をもたらす人物として予期していた。

あるいは、クリスマスの祝祭との関連を考慮すれば、ヘロデが期待していた芸人は、クリスマスの季節、突然屋敷に闖入して人々を驚かせ、芸を披露する者達、即ち Christmas mummer としてのフールだったかも知れない。

彼はキリストを *this prophette* とよんで、フールの中にある神がかり的な面を我々に思い起こさせるかと思えば、The Feast of Foolsにおける王としてのフール・キングを思わせるかのよりに、キリストをキングと呼びつつ嘲笑する。

O, my harte hoppis for joie
 To se nowe þis *prophette* appere. (163-64; my emphasis)

Comes nerre, *kyng*, into courte. Saie, can 3e not knele?
 We schalle haue gaudis full goode and games or we goo.
 (236-37; my emphasis)

しかし、イエスはヘロデの望んだ様な奇跡も笑いの種も提供しない。それどころか、この劇では、キリストには一言の台詞も与えられていない。伝統的なフールの行動として、一方で多くの mummer がする様な沈黙の演技があり、他方では、わけの分からない戯れごとを連発する騒々しいフールもいる。キリストは、期せずして、黙りこくった芸人の様にヘロデや彼のとりまきを煙にまくことになり、期待にかられていたヘロデの興奮と苛立ちを一層高める。彼はキリストの沈黙を破ろうとするあまり、意味の通らぬ macaronic な大騒ぎに身を委せる。

I faute in my reuerant in otill moy,
 I am of fauour, loo, fairer be ferre.
 Kyte oute yugilment. Vta! Oy! Oy!
 Be any witte þat Y watte it will waxe werre.

Seruicia primet,

Such losellis and lurdaynes as pou, loo.

Respicias timet.

What þe deuyll and his dame schall Y now doo? (239-46)

ヘロデは、当初、キリストの沈黙をフル特有の演技の一部と取ったふしがあるが、やがてそれにも飽きて、キリストに何かを言わせようと、自ら意味のない言葉をわめきたてる。従って、イエスの沈黙も、ヘロデの喧噪も、伝統的なフルの姿に重なってくる。囚人となったフル・キングの前にいるのは、ガリラヤの王であるが、その王の馬鹿馬鹿しい振舞いこそ、フルと呼ばれるにふさわしい。事実、キリストをフルと決めつけ、自らの馬鹿騒ぎ (folly/misrule) の口実としているのはヘロデ自身であり、キリストは、ここで行われていることには何の積極的な関係もない。彼は、祭りや宴席でフルが他の人々の馬鹿騒ぎ (folly) を引き出したように、ただ無言で立つだけでヘロデの宮廷をカーニバルの街頭のようにしてしまい、それによって、我々は、地上の権力の愚を知らされるのである。我々は、表面上はフル・キングと思われた者が、すべての王の王であり、ヘロデや他の権力者達こそフル・キングであったということに思い至る。

このヘロデの劇と共に、フル・キングとしてのキリストを見せてくれるのは、兵士達によるイエス嘲弄の場面である。これは、聖書の記述に基づいており、4大サイクルの全てで取り上げられている。ここでは二つの主要なモチーフが見受けられ、そのどちらもが、祝祭的慣行と関連しえたものである。ひとつは、Blindman's Buff とか Hot Cockles と呼ばれる遊びのバリエーションである。これは、一種の目隠し鬼だが、サイクル劇では兵士達がキリストに目隠しをして殴り、誰が殴ったかを哀れなキリストに言わせようとして楽しむ、という残酷なゲームとなっている。ここでは、タウンリー・サイクルから、その部分を引いておく。

1 Tortor. Godys forbot ye lefe, bot set in youre nalys

On raw.

Sit vp and prophecy— [To Jesus, as they strike in turn.

Froward. Bot make vs no ly—

2 Tortor. Who smote the last?

1 Tortor. Was it I?

Froward. He wote not, I traw. (Coliphizacio, 409-14) ⁶⁾

単なるゲームであるから特定の祭日や慣行においてしか見られないわけではないだろうが、祭日の楽しみとして行われる事もあったに違いない。ジョセフ・ストラットが指摘している様に、1598年に上演されたヘンリー・ポーターの喜劇、*The Two Angry Women of Abington* では、

6) 本論におけるタウンリー・サイクルのテキストは、A. C. Cawley, ed., *The Wakefield Pageants in the Towneley Cycle* (Manchester: Manchester Univ. Press, 1958).

この遊びはクリスマスの遊びであると書かれている⁷⁾。事実、タウンリーの兵士達は、これを始めるにあたり、その祝祭的な性格を言っている。

2 *Tortor*. Go we now to oure noyte with this fond foyll.

1 *Tortor*. We shall teche hymn, I wote, a new play of *Yoyll*,

And hold hym full hote. Fraward, a stoyll

Go fetch vs!

(343-46; my emphasis)

もうひとつのモチーフは、キリストを、偽の王 (mock-king) として戴冠させ、嘲弄することである。もちろん、これは、祝祭におけるフール・キングの選出と拝礼にそのまま置き換えられ得る行為である。例えば、ヨークの *The Tilemakers' Play* (XXXIII) では、兵士達はまずキリストを mock-king として戴冠することに決める。

II *Miles* O fule, how faris þou now? Foull mott þe fall!

III *Miles* Nowe because he oure kyng gon hym call

We will kyndely hym croune with a brere.

IV *Miles* ʒa, but first þis purpore and palle

And þis worthy wede sall he were,

For scorne.

I *Miles* I am prowde at þis poynte to apper.

II *Miles* Latte vs clethe hym in þer clothes full clere,

As a lorde þat his lordshippe has lorne.

(XXXIII, 387-95)

彼らはこの後キリストに茨の冠をかぶせ、更に、王の錫杖 (septure) 代りの棒切れを渡す。

IV *Miles* ʒa, his blondre has hym broght to þer bales.

Now reche hym and raught hym in a rede

So rounde,

For his septure it serues indede.

(XXXIII, 402-05)

この錫杖こそは、ウィルフォードの名著 *The Fool and His Scepter* の題名にうたわれている様に、王とフールに共通するものである。

キリストをこの様にフール・キングとして戴冠させた後、彼らは、次の様に王を讃える。

7) Joseph Strutt, *The Sports and Pastimes of the People of England*, ed. William Hone (London: Chatto & Windus, 1898), p.499; Henry Porter, *Two Angry Women of Abington* in *A Select Collection of Old English Plays*, ed., Robert Dodsley (1744), Fourth Ed. ed., W. Carew Hazlitt (1784-86; rpt. New York: Benjamin Blom, 1964), Vols.6 & 7, p.364.

I Miles ȝa, it is gode inowe in þis nede,
Late vs gudly hym grete on þis grounde.
Aue, riall roy and rex judeorum,
Hayle, comely kyng þat no kyngdom has kende.
Hayll vndugthy duke, þi dedis ere dom,
Hayll, man vnmyghty þi menȝé to mende.

III Miles Hayll, lord without lande for to lende,

Hayll kyng, hayll knave vnconand.

IV Miles Hayll, freyke without forse þe to fende,

Hayll strang, þat may not wele stand

To stryve.

(406-16)

兵士達の、嘲笑に満ちた拝礼と賛美は、『エルサレム入場』の場面のパロディとなっているのは明らかだろう。市民や子供達の歓迎の声に迎えられ、王とあがめられてエルサレムに入ったイエスは、愚者の祭りが終るとき、愚者の王の権力が終るかの様に、民衆をまどわすフル・キングとして処刑される。ヨーク・サイクルのThe Shearmen's Play (XXXIV)において、兵士の一人は言う。

We haue bene besie all þis morne

To clothe hym [Jesus] and to croune with thorne,

As falles for a fole kyng,

(26-28)

彼ら兵士に、あるいは、こう言わせたヨークの作者に、祝祭における愚者の王のイメージが浮かんでいたのは明らかではないだろうか。

以上、サイクル劇の中から幾つかの場面を取り上げて、祝祭的慣行との比較を試みた。サイクル劇のキリストは、王達の王、真の王でありながら、偽りの王として、そしてフルとして嘲笑され、彼の王権を否定される。一方、愚者の祭りなどの祝祭の王は、権力を持たないフル・キングとは言え、束の間の特権を享受する。この二者の間には接点があるのではないだろうか。

サイクル劇は、民衆文化の伝統と深く結び付いているとは、誰しも感じるのだが、その背景である民衆文化そのものは、文学作品や公文書の様には、現在まで残されていない。そういった中で、教会、つまり、公的な機関と関連したクリスマスの季節の慣行は、中世劇を読み解く大きな手がかりになりうると思われる。